蛍袋

松岡隆子

始まりの紅をひそかに蛇苺
雨ならばこそのむらさき花菖蒲
その先の川波明り花菖蒲
あぢさゐの蒼しあをしと溺れゆく
心憂き日は滝音に身を打たす
巌とふゆるぎなきもの滝激し
滝壺を出て美しき水となる

晴れてゐて雨ふつてゐて蓮浮葉

記憶もつるる烏瓜咲きだして

屈託を蛍袋に零しけり

何やある夜を徹して夏蛙

一病の夫にぬくめる一夜酒

先日水元公園の菖蒲まつりに行った。あいにくの雨だったがその分人出も少なくゆっくりと観賞できた。雨に揺らぎながらも姿を崩すことなく優雅に咲いている花菖蒲の美しさに心を奪われた。ところがいくら眺めていても一向に言葉が浮かんでこない。構えてはだめだと思うもののつい構えてしまう。そんな時思い出すのは「栞」創刊号に掲げた先生の言葉である。「良い俳句を生む、ということは、結局のところ自分を、自分の周辺を、いかに澄んだ目で見ることが出来るか、ということにかかっているように思うのです」。確かにその日は心のどこかに翳りがあった。「澄んだ目で」という言葉を改めて心に刻んだ。